

小学校外国語科における評価の考え方



赤沢 眞世

佛教大学教育学部 准教授

専門は教育学（教育方法学）、小学校英語教育。

1 「外国語」の評価では、どのような内容を保護者へ伝えるのか

外国語科においては、実際のコミュニケーションの場面で活用できる「知識・技能」の一定の定着が目指されます。そのため、外国語活動と同様に「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動が展開されますが、その活動に必要な単語や表現が習得されているかも評価の対象とされます。さらに外国語科では「読むこと」「書くこと」についても丁寧なステップを通して指導がなされ、活動の中で適切に読めているか、書けているかも評価の対象となります。

また、こうした「知識・技能」の定着をふまえて、外国語活動や外国語科でより大切にされていることは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、他者に配慮しながら伝え合うことです。単語や表現を覚えて発話できるようにするだけではなく、自分が本当に伝えたいことをどのようにしたら他者によりよく伝えられるのかを考えて、これまでに学習した単語や表現を駆使したり、伝える際の工夫をしたりすることが求められるのです。評価でも、主に「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の2つの観点においてこのような子どもの姿を捉えます。

2 新3観点では、何をどのような場面で評価するのか

① 「知識・技能」

「知識・技能」については、各単元で求められる新出単語や新出表現について理解し、繰り返し聞いたり、やり取りしたり、発表メモを書いたりといった活動を通して定着を目指します。そのため、「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の5領域が対象となります。単元の中盤ごろから最終の課題に向かうまでに位置づく「聞くこと」の活動、あるいは

「読むこと」「書くこと」の活動，そして場面設定が明確で難しくない「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」の活動（最終の活動に向けた練習的な位置づけの活動）で，行動観察をしていくとともに，ワークシートや教科書への書き込みを「記録に残す評価」として評価していきます。

②「思考・判断・表現」

実際のコミュニケーション場面で，その目的や場面，状況に応じて，他者とのようにしたらよりよく伝え合うことができるかを意識して活動ができているかを見ます。単元の最終場面には，「町のおすすめの場所をしょうかいしよう」といった単元の目標に沿って，「話すこと [発表]」や「話すこと [やり取り]」の領域のパフォーマンス課題¹が設定されていることが多いため，「思考・判断・表現」の観点は，このような，ある程度時間をかけた大きな活動で評価します。つまり，児童が当該単元の学習内容である単語や表現を使いこなし，相手意識を持ちながら活動をする，発表ややり取りの課題を設定することがまず重要です。

そしてその活動での子どもの具体的な姿をできるだけ丁寧に捉え，評価していくことが必要です。たとえば，発表の原稿を練るときに話す順番や語彙を工夫したり，発表の際には自ら相手に問いかけたり，目線やジェスチャーを工夫したり，これまで習った表現を駆使して何とか伝えようとする姿勢などが見られたら「記録に残す評価」として記録します。その際には，子どもが目指す姿をイメージできるようにするために，ルーブリック（パフォーマンスの具体的な評価基準表）を用いて，目標となる姿をクラス全体で共有したり，よくできている子どもに発表してもらったりして，フィードバックをクラス全体に返すことも重要です。

③「主体的に学習に取り組む態度」

この観点は，各単元や各領域単位で設定をしていたとしても，児童の姿，とりわけ変容を細かく見取ることは難しいため，いくつかの単元のまとまりや，学期ごと，あるいは年間でその姿を見ていくことも可能です。自分の課題を意識し，意欲的に活動に取り組んだり，自分自身の改善点や次のめあてを見定め，工夫し

¹ 友達と協力して大きな課題を達成するコミュニケーション活動。令和2年度版『ONE WORLD Smiles』では Final Activity がこれに相当します。

ようとしたりしている姿を見取ります。そのためには、たとえば、ふりかえりカードや教師の声かけにおいても、どんとやり取りを意欲的に行うことを褒めるなど、子どもが「次はここをがんばろう」という視点を持てるような指導を意識する必要があります。その際には、パフォーマンスの具体的な評価基準を表すルーブリック（上述）を活用して、児童自身が自らの学習過程や目標を見つめる機会やツールがあるとよいでしょう。

3 評価の際の留意点

① 単元を超えて、年間を通じてバランスよく評価できる年間評価計画を作成する

各単元で5領域3観点（計15の観点となる）を学級全員対象に評価をしていくことは現実的ではありません。また、各単元の目標や内容に応じて、育みたい（育むべき）領域や観点があります。そのため、指導はもちろん常に5領域3観点的な総合的な育成を念頭に置きながら進めていきますが、「記録に残す評価」として児童の姿を捉えていく際には、年間（あるいは学期）を通じてバランスよく5領域を評価する機会が設定されているか、また、年間（あるいは学期）を通じてバランスよく「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を評価する機会が設定されているかの2つの軸をもとに、どの単元で、どの領域に重きを置くか、どの観点到重きを置くかを満遍なく設定することが重要です。こうした年間評価計画は、授業実践が進んでいってからは評価資料がそろわない事態にもなってしまうため、なるべく早い段階で立てておくことが必要です。

② 単元における評価計画を作成しておく

①の見直しを持つことと同様に、各単元の単元構想においても、いつ、どの活動で「記録に残す評価」を行うのかをあらかじめ設定しておくという「評価計画」が必要です。「知識・技能」の評価として何を証拠として記録に残すか、また、主に「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の観点を設定することとなる最後の大きな活動をどのように記録して評価に残すか（動画に撮る、ワークシートを書かせるなど）を具体的に設定することが重要です。

その際には、1時間の授業で評価したい領域や観点到適した具体的な活動

を1つ（多くとも2つ程度）決めてそれを評価場面として設定し、それ以外
は評価のフォローアップ（④で後述）の視点から個別に評価を修正していく
機会として考えておく、という方法となるでしょう。

③パフォーマンス課題の評価におけるルーブリックの活用

単元の最後の発表ややり取りの大きな活動については、パフォーマンスを
評価するためのルーブリックを作成するなどして、具体的にどのような姿が
見られれば A/B/C なのかについて教員間（担任、英語専科、ALT など）、
そしてできれば、児童とも共有できるとよいでしょう。

例えば、「話すこと [発表]」のパフォーマンス課題では、次のようなルー
ブリックの活用が考えられます。

「話すこと [発表]」のルーブリック例

	英語表現	発表内容	伝える工夫 (表情、動作、声)	ポスター・ 発表資料
A	当該単元の表現だけでなく、伝える目的や場面、状況や相手に応じて、これまでの既習事項を組み合わせ用いている。	相手により伝わりやすいように意識して、伝える内容やその順序を考えている。自分の思いや考えを効果的に伝える内容となっている。	豊かな表情で、アイコンタクトやジェスチャーを効果的に用いて伝えられている。伝える声の大きさやスピードが的確である。	相手の興味を促したり、理解しやすい内容やレイアウトになっている。相手のよりよい理解のために、話す順序に工夫が見られる。
B	当該単元の表現を適切に用いている。	自分の伝えたい内容を伝えることができている。	アイコンタクトやジェスチャーを何とか用いようとしている。聞こえる声で伝えている。	相手に伝わるように、レイアウトや内容に工夫が見られる。
C	当該単元の表現を使うのに自信のなさが表れており、間違いも見受けられる。	自分の伝えたいことを伝えるのに苦労している。	アイコンタクトができておらず、ジェスチャーも用いようとしていない。声が相手に届きにくい。	レイアウトや内容について、工夫が見られない。
主に 対応 する 観点	知識・技能 思考・判断・表現 主体的に学習に取り組む態度			

まず A, B, C の行では、以下のような児童の姿を想定した記述をしています。当該単元で必要な知識・技能の定着をふまえて、設定された場面や状況に応じて活動の目的を達成できている（伝え合っている）姿を「おおむね満足できる」姿として到達目標とし、Bとしています。さらに意欲的にコミュニケーションを取ろうとし、よりよいコミュニケーションを図ろうとする姿が見られれば、十分満足できる姿として A としています。また「おおむね満足する」姿に至っていない様子を C として具体的に示しています。

表の上段の横軸には、「話すこと [発表]」のパフォーマンス課題をどのような項目で評価するかという評価項目が並んでいます。一般的には、発表の際に用いている「英語表現」、「発表内容」、そして「伝える工夫」が項目として挙げられることが多いでしょう。さらにポスター発表などで、相手によりよく伝わるように工夫した資料を作成する場合、それら「ポスター・発表資料」も評価対象になることもあるでしょう。

このような表をふまえて、それぞれの観点で、どのような姿になれば A なのかを教員間で共有したり、児童と教師が共有したりすることが重要です。どのような点を改善すればよりよい発表になるのかを、B や C の児童も理解し、実践できるように、A の児童の姿の具体的なよいポイントを褒めたり紹介したりします。このようなループリック表をそのまま児童に提示したりすることもありますが、重要なのは、ループリックを作ればよいということではなく、発表であれば「どのような姿になればよい発表なのか」という、目指すべき姿が児童にも教師にも具体的に共通してイメージが持てるようにすることです。

なお、主に対応する評価の観点をループリックの項目の下に記しています。ただ、たとえば「主体的に学習に取り組む態度」は、この発表では「伝える工夫」の姿として現れてくると考え、ここに記していますが、その項目だけで「主体的に学習に取り組む態度」を見取ることができるということではありません。この課題に向かうまでの過程における試行錯誤や粘りづよく取り組む姿勢、次の自分の課題を見極めている姿など、ワークシートや日々の行動観察等も含めて、より総合的な視点で見取ることが求められます。

また、「思考・判断・表現」も、内容をよりよく伝えようとする、「発表内容」だけではなく、「伝える工夫」についても考慮することとなり、「主体的に学習に取り組む態度」と切り分けて評価することは難しいと考えられま

す。現実的には、「思考・判断・表現」の評価が(c)であるのに「主体的に学習に取り組む態度」が(a)になるなどの、極端な事例は生まれてこないでしょう。それぞれの観点による見取りは、相互に関連してくると思われます。とくに、「思考・判断・表現」は「主体的に学習に取り組む態度」と一体的に評価していく必要があります。

ただ、こうしてルーブリックとして項目に分けて整理することで、「発表」というパフォーマンス課題に向けて具体的に指導を考えるときに、どのような点に焦点を当てればよいのか、またどういった姿が発表の目指すべき姿なのかを明確に想定することができるようになり、指導と評価の一体化という点からも、ぶれない指導や支援ができるようになると考えます。

最後に、あくまでもこのルーブリック例は一例です。個別の課題や児童の実態によって、Aの姿の記述や焦点を当てたい観点も変わることもあるでしょう。(例えば、相手の理解を確認するためにOK?というような問いかけや、Do you like ...? How about you?などの聴衆とのやり取りを入れる発表をすることを目指した指導であれば、そのような記述も加わってくると思います。)

繰り返し、このようなパフォーマンス課題を設定していくと、単元や授業の積み重ねの中で、当該のパフォーマンス課題ではどのような目標を立てるのか(目指すべき姿はどのようなものか)、前後のつながり(指導の系統性)も考えていく必要が出てくるようになります。まずは、単元の最終の課題で、このような例を参考に、ルーブリックを活用してみてはいかがでしょうか。

④フォローアップの視点を持つ

「記録に残す評価」を行う場面において「おおむね満足できる」(b)に届かず、「努力を要する」(c)評価の児童については、その後の活動において学習改善・授業改善のための適切な手立てを行うことがまず重要です。その上で以後の活動場面において個別にフォローアップの評価を行います。到達目標として示されている姿(b)が見られれば、修正評価を行い、最終の観点別評価をBとします。

このようなフォローアップの視点から言えば、最終時のみに評価機会を設定する評価計画ではなく、フォローアップの期間も想定した評価計画となっているとよりよいでしょう。たとえばリスニングの主な評価機会として1つの活動が設定されていたとしても、その後のやり取りの活動や発表の活動で、

友達の話すことを聞いて理解できている様子を，その児童にとっては再度の評価場面として設定することが可能です。

また，「話すこと [発表]」の評価については，記録に残す評価を行うタイミングによって個別の状況に差が出ることが考えられ，児童全員を見取ることが現実的に難しい場合もあります。そこで授業中に見取りに加え，学期に1回程度のパフォーマンス評価において，総括的な評価を行うことも考えられます。

****最後に****

以上が評価の考え方として大切にしたいポイントや留意したいポイントです。すべてを一気に実践していくことは難しいですが，行動観察に加えて，「記録に残す評価」をどこに設定するのかを授業の実施の前に想定しておくこと，また，単元の最終段階に設定されたパフォーマンス課題を進めていく際に，ルーブリックを試しに活用してみよう，というところから，ぜひ始めてみてください。

*本資料の考え方に基づいて，弊社 WEB ページにて「[ルーブリックを含む評価事例](#)」を紹介しています。